



キャンパス・コラム

卒業

若いころは、季節感というのが、まったくなく、植物や風や鳥には、なんの興味ももてなかった。ところが、年齢のせいかな、最近では、季節のうつりかわりに、とても敏感になっている。なんといっても、こちらの心にさざ波をたてるのは、風の香りの変化だ。「香り」というのは、正確ではないかもしれない。とにかく、風の層が変わったと身体全体で感じる。風ではなく、われわれを包みこむ空気全体と言った方が、的を射ているだろうか。肌合いと厚みが、それまでとは、まるで異なるのに気づく。

夏がいきどまりになると、ある日突然、秋の風がやってくる。秋というのは、こういう季節だったんだと、はっきり思いだす。そういうまわりの空気の変化のことだ。ここ数日、春がやってきた。毎年、春になると、この風を、わたし

の細胞は受けていたはずなのに、とてつもなく懐かしい。幼なじみとの再会のような。この季節が、またやってきて、多くの花や動物たちが、開き、うごめきはじめた。地域全体が、おおきく衣替えをする。そのあとに控える重く輝く夏も、垣間見えるようだ。

これが、わたしの卒業のイメージである。この時期には、なにかが、すでにはじまっているのだ。卒業式は、小学生のときにでたっきり、その後一度もでていない。長くいたところは、誰にも知られず、ひそかに去りたいという美学をもっているわけでもなく、人生の卒業式には、本人は、けっしてでられないのに、それ以前のものには、本人も出席するということに違和感をかんじてしまう、というわけでもない。いろんな事情が重なったのと、「式」というのが苦手なだけだ。

駄弁は、これまで。御卒業おめでとう。

広報委員 中村昇（文学部教授）